

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

各教科等における特徴的な指導の実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

長野県南佐久郡南牧村

○学校名

南牧村立南牧中学校

○学校のURL

<http://minamimaki-jh.sakura.ne.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年2学級 【特別支援学級】1学級 【合計】7学級

○児童生徒数

【全生徒数】91名

(内訳：1年生29人、2年生33人、3年生29人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

学校教育目標	1 独創的な中学生（考える）	知
	2 心豊かな中学生（感動する）	徳
	3 根強い中学生（やりとげる）	体

1 本年度の重点目標

「伝え合うことができる生徒」の育成

願う姿 ・ 「自分の考えや願い」を伝え合う姿 ・ 思いやる姿

2 人権教育の目標

身のまわりにある様々な差別に気づき、基本的人権を尊重する立場から差別を許さない心情を育む。また、差別を自分の問題として受けとめ、積極的に解決に向かっていくことができるようにする。

- (1) 自分との関わりの中で、差別や偏見に気づき、お互いの人格を認め合い、一人ひとりの能力を十分に発揮できるような学級をつくることができる。
- (2) 差別の不当性や差別の仕組みを歴史的背景や事実から正しく理解し、自分の生活との関わりの中でとらえ、対処できる。
- (3) さまざまな差別に屈しないで人権尊重の立場から差別を見抜き、差別に立ち向かう心情と態度を養う。

3 平成24年度 人権教育研究テーマ

「人権感覚を高めるための指導のあり方

～多様な価値を認めあえる活動を通して～」

○人権教育にかかる取組の全体概要

1 生徒の姿

本校は約 100 名の小規模校である。生徒は素直で、明るく人と接することができる生徒が多い。また、少人数のためお互いのことをよくわかっていて、友達の困っていることに手を貸したり、励ましたりすることができる生徒が多い。

一方で、少人数による人間関係の狭さも見られ、友達を固定化したイメージで見ってしまう生徒も見られる。また、自分たちの身の回りにある人権問題に対して、関心を持って自分の問題として受け止めたり、問題を解決しようと取り組んだりできない生徒も見られる。

2 人権教育の視点

- ・自分を振り返り自尊感情を高めたり、友達のよさを見つけることで他尊感情を高めたりできるように、生徒同士が関わり合い、思いを分かち合う学習を積み重ねていく。
- ・本校の特色である少人数での学習を生かした指導により、生徒自身が考えたことを伝え合い、認め合うことで人間関係を育む教科指導を重ねていく。
- ・障がいのある方をはじめ、様々な方の生き方や願いに触れたり体験したりする中で、差別のない社会の実現や差別を許さない強い心を育む。

3 研究内容

(1) 人権教育研究

- ① 生徒の実態をふまえた人間関係づくりを中心に据えた指導のあり方
- ② 人権感覚を高めることを意識した教科学習のあり方

(2) 人権啓発事業

- ① P T A 講演会、人権授業参観、地域のお年寄りとの交流等を通して人権意識を高める。

4 研究の重点

重点（１）体験活動や他者との触れあいなど活動の中で、自分の願いや思い、悩みを伝え合い、相手意識をもちながら学ぶことを通して、多様な価値観を認め合う学習。

重点（２）友達と関わりながら学ぶ中で友達の良さを認めたり、友達の良さを味わったりすることを通して、他者の喜びを自分のものとしたり自尊感情を高めたりする学習。

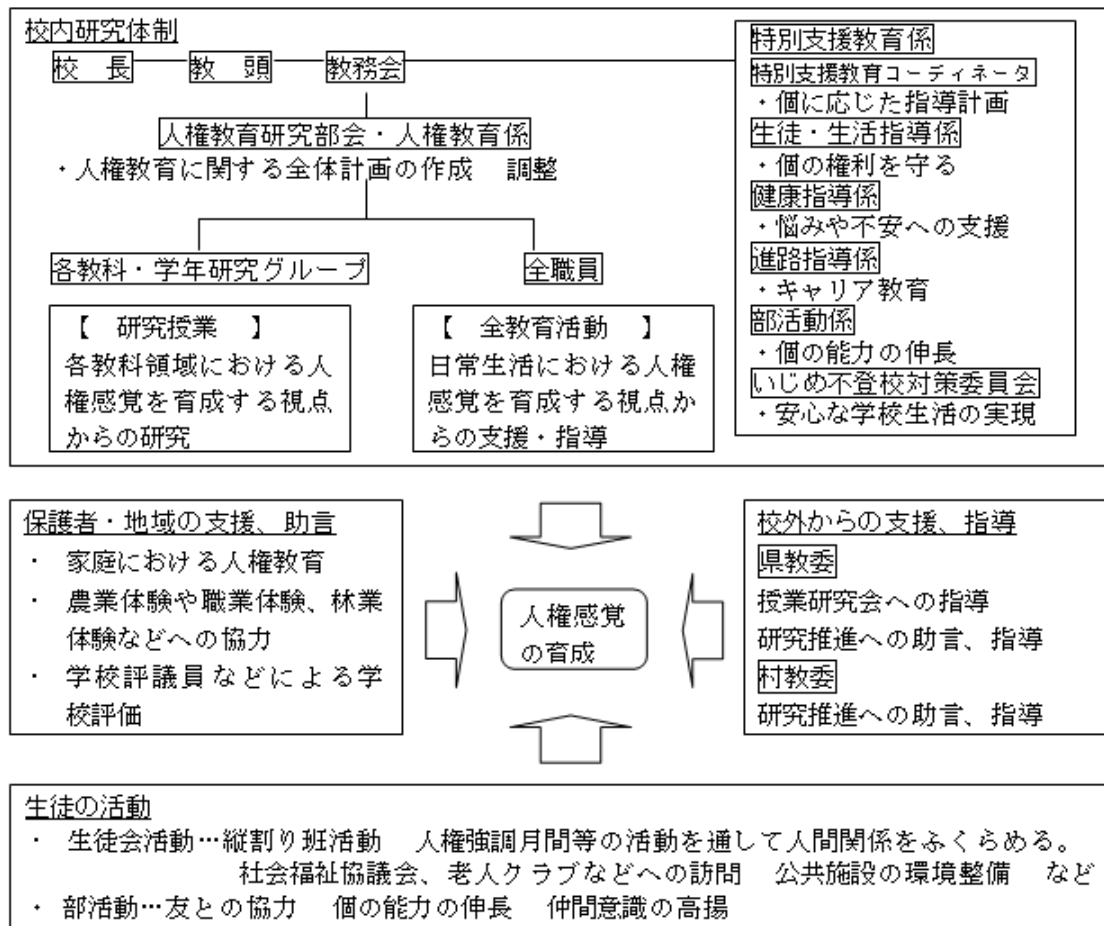
重点（３）生徒一人一人の言動に込められている意味や願い、悩みなどを理解して、生徒の人権意識や、生徒の目の前にある課題に主体的に関わろうとする態度の高まりをとらえようとする教師自身の人権感覚の育成。

3. 特色ある実践事例の内容

1 重点を実現するための方策

- (1) 各教科等において人権教育の視点を明確にした授業研究を行う。
 - ・「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」や人権アンケートを実施した結果をふまえ、生徒同士の人間関係をとらえたうえで生徒同士の関係を広げたり新たな関係を作ったりする学級活動や教科指導を行う。
 - ・友との学びを振り返り、シェアリングを大切にした学習を行う。
 - ・少人数での学習を生かし、生徒同士が関わり、考えたことを伝え合う教科学習を行う。
 - ・生徒同士がお互いのよさを認め合う場面を設定する。
 - ・教科のねらいに込められた人権教育の内容について、評価規準を明確にした授業を行う。
- (2) 体験活動や人と触れあう活動を通して、相手意識を持ちながら自分を振り返って考える学習を行う。
 - ・障がいのある方と関わったり、ブラインドウォークや車いすなどの体験をしたりする単元展開を構想し、生徒や保護者、地域の方と体験的に考える学習を行う。
 - ・学級や縦割り班などで人間関係を広げる活動を行う。
 - ・「さん」を付けた呼び方や友達の話の聞こうとする態度など、相手を大切にした行動のあり方を日頃の生活や授業の中で考え身につける場を設定する。
- (3) 講演会や交流会を通じた地域や保護者への啓発活動を行う。
 - ・地域の方や保護者へ向けて人権教育に関わる授業の公開、人権講演会等を行う。
- (4) 生徒とともに教師も考え、教師自身の人権感覚を磨く。
 - ・「よいところみつけ」を行い、生徒のよさを教師自身がとらえる力を高め、生徒に伝える。
 - ・研究授業での生徒の関わりをつぶさにみとり、生徒の活動の背景にある意識や人権感覚をとらえる研修を行う。

2 人権感覚の育成に関する全体構想



4. 実践事例の実績、実施による効果

1 少人数での関わり合いを生かした教科における人権教育（事例1）

(1) 単元名 「方程式」

(2) 教科としての人権教育指導観

1学期末に行った数学の教科学習のアンケートでは、授業について7～8割ほどの生徒が授業は「楽しい」「わかりやすい」と答えている。また、「グループで相談し合った学習が楽しかった」「ホワイトボードで書いて話し合う勉強がしたい」等個別の記入も見られた。反面、「積極的に発言している」「自分から調べたり考えたりしている」などの項目で低い評価になっていた。

振り返ると、問題場面のとらえ方や計算の処理の仕方など、教師側の教え込みが多く、生徒たち自身が既習事項を振り返りながら、新たな数理を見つけていく生徒主体の学習になっていなかったことが一因と考えられる。また、答えを求めていく過程で、友達同士の関わり合いを生み出すような指導・助言ができていなかった点もあげられる。そこで、生徒一人ひとりが自分の考えを持ち、友達同士関わり合いながら学んでいく、支え合う学習をめざしていきたいと考えた。

数学「方程式」の単元では、自分の考えを持ち、友達同士で自分の考えを交換し合う姿を大切にしたいと考えている。そして、話し合いの場面では、友達との相違点に気付き、友達の考えのよさにふれる経験をさせることで、自分の考えに自信を持って

発表していく力につなげていきたいと考えている。また、単元の終末に問題づくりの場面を設定し、普段数学嫌いの生徒たちが、興味関心を持って意欲的に関わる学習をしたいと考えた。

このような学習を通して、絵や表などの具体物をもとに自分の考えを伝え、相手の考えを理解し合う、支え合う学習を通して、自分の考えや相手の考えの良さに気付きながら、論理的に筋道立てて考えるよさを味わわせていきたい。

(3) 目標

①単元の目標…文字を含む等式から、文字の値を求める方法を理解し、これを用いることによって、実際の問題を形式的、能率的に処理できることを知り、さらにその方法を活用できるようにする。

②人権教育に関わる視点

- ・主体的に考え、自分の意見や考えを友達に進んで伝えようとする。
- ・友達の意見を受容的に受けとめ、自分の考えとの共通点や相違点を見つけたり、友達の考えの良さに気付いたりする中で、互いの考えを認め合う。

(4) 単元展開 (研究授業に関わる部分のみ) 全 16 時間扱い

◎学習活動 ・予想される生徒の反応 ☆教師の支援

2000円で、ばら6本と380円のかすみ草を買うと、おつりが300円でした。ばら1本の値段はいくらでしょうか。

◎数量の関係を絵に表し、言葉の式に整理し、方程式を立て問題を解く。

- ・絵に表すと場面が分かって数量の関係がわかりやすいぞ。
- ・言葉で式が作れると、その値を式にしていけば方程式ができそうだ。
- ・求めたい値を x とおけばいいんだな。

☆仲間同士、表した絵や言葉の式等自分の考えを発表し、互いの考えを交換させる。

ケーキ6個と80円のプリン1個の代金は、ケーキ1個と150円のジュース1本の代金の4倍になりました。このケーキ1個の代金はいくらでしょうか？

◎求めたい値を文字でおき方程式を立てケーキ1個の代金を求める。

☆前時の学習をもとに、絵で表し言葉の式で表し方程式を立てさせる。

過不足の問題を考える場面

☆磁石などを使って場面のイメージをつかませる。

☆線分図に過不足の様子を図示させる。

◎方程式を利用して問題を解く。

- ・問題の様子を理解するには線分図も有効だ。

☆あめの個数を2通りの表し方で表すことを考えさせる。

速さ・時間・道のりの問題を考える場面

☆弟と姉の速さ・時間・道のりの関係を表に表させる。

◎求める値を文字でおき方程式で解く。

☆20分後に追いかけることにし、解が問題に合わない場合もあることを確認させる。

- ・駅より先で追いつくことになるぞ？

☆方程式を使って解く手順について確認させる。

自分たちの問題を考える場面

(本時)

◎方程式を使って解く問題を実際につくり、方程式の解の意味や解の吟味の必要性などへの理解を深めさせる。

(5) 本時案

①主眼

様々な文章題について、絵や表などに表し、方程式をつくって解いてきた生徒たちが、パン屋さんで買い物する様子を方程式を使って解決する問題をつくる場面で、自分の作った問題を班で出したり、方程式を作って解き、問題の適切さについて話し合ったりする活動を通して、問題や解が適切かどうかを判断することができる。

②本時における人権教育の視点

- ・グループで自分の作った問題を解いてもらったり、考えを伝え合ったりしたことは、自分の考えに自信を持ったり、自分の考えの良さを味わったりすることにつながったか。
- ・数学の授業において、問題と解の適切さについてグループで問い合う場面を設定したことは、相手の考えを理解しようとしたり、友達の考えの良さを認めたりすることにつながったか。

(6) 実践を通して

なかなか問題を作ることができず困っていたA生はグループ活動で途中まで作った問題を問題カードに書いて、自分の悩んでいることを伝えた。すると、B生は「これは分かる？」と、A生に何度も確認しながら、メロンパンを1つ買うときにドーナツを買える個数やおつりが変わることについて、自分のノートに書いて説明した。A生は、B生の説明を聞きながら作りかけの自分の問題を見返し、最後に、自分なりに問題をつくることができた。そして、問題を作り終わると、「Bさんのアシストのおかげでできた」とB生に語りかけた。それを聞いて、B生は「よく頑張ったね」と声をかけた。

- ・授業後、B生は、A生の悩みを聞いて「A生は買う物の個数を変えたとおつりや他に買う物の個数が変わることが分からないから問題が作れないのかもしれない」と考えた伝えてくれた。B生は、A生の分からない点を確認、A生が分かるように語りかけている。それによりA生は、自分なりに問題を作ることができた喜びを語った。B生はその頑張りを認めている。このように、教科の授業の中で、生徒同士が関わりながら学ぶ活動を設定することが、支えたり、支えられたりする喜びを味わうことにつながる。
- ・この授業では、問題カードを見せ合う活動を行い、生徒同士が自分の考えを伝え合う手立てとした。このように、生徒同士が自分の思いや考えを伝え合う学習方法を位置づけたことが、お互いに認め合うことにつながる。

2 お年寄りとの交流体験を通して、相手意識を持ちながら学ぶ（事例2）

(1) 題材名 「わたしたちにできること～南牧村のお年寄りとの交流」

(総合的な学習)

(2) 単元設定の理由

1学期には、デイサービスの利用者さんとの交流を行った。4つのグループに分け、レクリエーションを計画、実施した。その活動を通して、友達の良い姿を認め伝え合う活動を繰り返し行ってきた。その結果、友達のお年寄りへの気配りの様子に気付くことができた。また、交流活動を通して、お年寄りの方からの「ありがとう」や「また来てね」という何気ない言葉をかけられることに、喜びややり甲斐を感じる生徒が多く見られた。

本単元では、デイサービスの利用者と交流したことを通して、これから交流をしていくうえでどのような活動ができるかを考え、話し合うことを題材とする。デイサービスに数回訪問し、自分たちで考えたレクリエーションで、お年寄りと交流し、楽しい時間を過ごすことができた。お年寄りの方々との交流から、体や声を自由に扱えないお年寄りとの交流する難しさを感じ、どうすればみんなで楽しめるのかについて話し合ってきた。また、デイサービスでの交流会を通して、お年寄りの反応を気にかけることができる生徒や、自分たちの交流の仕方に疑問を抱いている生徒も見られるようになってきた。そこで、お年寄りの方に思いをよせて活動を進め、話し合いができるようになってほしいと願い本単元を設定した。

さらに、この活動を通し狭い人間関係の中で育った生徒たちが、高校や社会に出た時に、相手の思いを考えながら、話を聞いたり、行動したりすることができるようになってほしいとも願っている。

(3) 単元目標

お年寄りとの交流を考え、話し合うことを通して、友達のことを考えて行動することの大切さに気付き、活動することができる。

お年寄りの方、それぞれの状況を思い起こしながら、自分たちができることを考えることができる。

(4) 本時案

①主眼

デイサービスのお年寄りと交流会を行ってきた生徒たちが、文化祭に来たくても来ることができなかったお年寄りがいたことを知り、文化祭の雰囲気を感じてもらうために、自分たちには何が出来るかを考え、話し合うことを通して、自分たちが願う交流会を具体化することができる。

②本時における人権教育の視点

お年寄りのことを考えながら、自分の意見を素直に友達に言えたり、友達の意見を認めたりして、友達とかかわりながら、話し合おうとしているか。

(5) 実践を通して

C生のグループの話し合いの様子

C生：(付箋に書いた考えを発表) 文化祭の時の様子についていろいろ語る。

D生：これいい意見だね。文化祭のおもしろかった所が話せるよね。

C生：(にっこり)

E生：声の大きさなどでその時の私たちの感情を伝えることができるね。

C生の学習カード

今回(の話し合い)は、特に自分から意見を出すことができたのではないかと思います。今日は司会進行をしたので、まとめたりするのが楽しかったです。みんなからの意見を聞いて、「なるほど～」と思うことがたくさんありました。

- ・ C生は自分たちの味わった文化祭の喜びを何とかしてお年寄りに伝えたいという願いをもち活動を進めていた。これは、それまで「地域のお年寄りとは触れあいたい」と交流を続けてきたことで、相手意識をもつことができたからだと考え。また、D生やE生も共通の体験をしてきたからこそ、文化祭の様子を伝えたいという強い願いとなったのだろう。
- ・ C生は、人前で意見を伝えることを苦手としている生徒であったが、この授業では、生き生きと進行役を行い、話し合いに取り組むことができた。D生に「いいよね」と考えの良さを認められたことが喜びや意欲につながったと考えられる。さらに、E生が意見をつなげ、広げたことにより、C生は自信を持ってその後の

司会を進めることができたのだろう。C生は、自分の考えがグループの仲間から認められ、生かされたことに支えられ自尊感情を高め変容したと考える。

3 正しい知識を得て、それを自分との繋がりとして考えながら学ぶ（事例3）

（1）題材名 「結婚について考えよう！」（学級活動）

（2）題材設定の理由

①教師の願いと指導

1学期に『連続・大量差別はがき事件』から考える現代人の人権問題」の講演をして下さった講師は、講演の前置きとして「今新たに起こり始めている人権侵害、その根底にあるものは、『希薄な人間関係と無知だ』」とお話してくださった。

最近は、「結婚差別」や「就職差別」などの「濃密な人間関係」だけでなく、加害者と被害者の間に何ら個人的関係もなく、全く利害関係も存在しない「希薄な人間関係」の中で、むしろ責任を持つことのない関係であるからこそ起こる差別、いじめ事象が起きている。

来年の4月より、より広い世界に旅立つ生徒たちに、義務教育最後の年として「正しい知識を持つことの大切さ」を知ってもらい、今現在できる範囲での「正しい知識」をしっかりと身につけ、「差別を許さない」「差別のない社会を作る」気持ちを持ってほしい。

長野県政世論調査においては、部落差別は「結婚」の過程で残存するという回答が最も多い（「一緒にいこうよ」人権教育指導事例集：長野県教育委員会）。今、「高校進学」を目の前にし、大きな自己決定を迫られている中学校三年生にとって、まだ具体的なイメージはないにしろ将来の「結婚」も大きな自己決定であることに変わりない。その中で、個人の生き方、人生観、人間観が問われる。

いわれない差別の存在や人権問題についての知識はある程度あっても、まだまだ実際に自分たちがしている行動では、それらのことを他人事としてとらえているかのように見える場合が多い。少しでも当事者の気持ちになって考えられるように心情面の成長を図りたい。今持っている自分たちの狭い価値観を広げ、結婚するであろう相手をつまらない偏見にとらわれて見ることのない感性を高めていきたい。

（3）題材の持つ価値

①個人的な資質を育む視点から

中学生なりに「結婚」が人生において大切な自己決定の場面であることは理解している。その相手の条件を考えることで、改めて自分の中にある人に対する価値観、人権感覚を見つめ直すことができる。

②社会的資質を育む視点から

結婚に関わる差別は、「自分はいいいけれど親が→親もいいいけれど親戚が→親戚もいいいけれど世間が」的な構造がある。だが、その差別を乗り越えて結婚し今は幸せに暮らしている人、また、心配していたが親も親戚も地域も気持ちよく祝福してくれた人などいる。その事例と向き合うことで、「差別をなくす明るい未来を展望」することができる。

③自主的、実践的な態度を育む視点から

今なお様々な偏見や差別があることを知りながらも、夢を語る。そして、当たり前のよう存在する価値観の違いをお互いに伝え、認め合う活動ができる。

(4) 単元展開の概要

①単元の目標

結婚差別の存在とそれに立ち向かってきた人々のことを学び、今後自分が差別事象に出会ったときにどのような行動をとるか考え、差別のない世の中を作っていく心を持つとすることができる。

②単元の概要

第1時 結婚差別を中心に差別について考える。

自分が結婚に反対されたらどうするかを考える。

今まで差別について学んだことを想起する。

第2時 実際に差別を受けた人の話を知り、不当性について考える。

DVD「ドキュメンタリー結婚」を視聴する。

どのような苦労や喜びがあったかのかを知り、感想を書く。

第3時 本時

第4時 現代社会に残る差別について考える。

どのような差別があるか出し合いながら、解決法を考えていく。

(5) 本時案

①題材名 「自分の結婚について考えよう」 (4時間扱い中 第3時)

②主 眼

結婚差別の存在とそれに立ち向かってきた人々がいることを知った生徒が、自分たちがどんな人と結婚したいかお互いに発表し合うことを通して、結婚差別を乗り越えるためにはどうすればよいか考え、解決のためには自分が強い意志を持つことと、周りの人とともに努力する大切さがわかる。

(6) 実践を通して

単元の終末の生徒の発言より

- ・自分の出身のせいで差別されるかもしれないという悩みに打ち勝ち、ビデオに出て被差別部落について語ってくれた、Fさん。これを見たおかげで、ぼくは少し被差別部落の方々の痛みや苦しみがわかった気がします。こうやって被差別部落について学び、正しく理解し、認めてあげることがみんなに広がれば、きっとFさんのいう「すばっと打ち明けられる人」がたくさんになり、素敵な社会になると思いました。
- ・差別のことを学習する前は、差別のことをあまり考えたことがありませんでした。講師のお話から、そしてハンセン病など、聞いたりしていることがつらかったこともありました。しかし、こういうことをしっかり学習し、自分たちが差別のない、つらい思いをなくしていける未来をつくっていかなければならないと思います。
- ・この授業を迎えるに当たり、部落差別を受けて苦しんだ経験を講師本人から語っていただく機会を持つことができた。その際にその方より「今新たに起こり始めている人権侵害、その根底にあるものは、『希薄な人間関係と無知だ』と、生徒自身が問題としてとらえていくことの重要性が語られた。これらの差別を生んだ事実について学び、理不尽な差別を受けた人の思いを学ぶ学習を通して、生徒は「差別がなくなるかは自分たちしだいだ」と自分の問題として考える事につながった。
- ・差別を生む背景にあるものは、現在の生徒にとって大きな壁としてなかなかとらえられなかった。多くの生徒が「自分は差別の壁を乗り越えて結婚できる」また、

「なぜ差別するか分からない」と考えていた。そのような生徒の思いは大切にしながらも、差別を本気で許さない強い心を育てていく必要がある。

5. 実践事例についての評価

1 実践事例についての評価及び課題

◇重点（１）に関わって

- ・事例（２）では、お年寄りの姿や様子を思い浮かべながら友達と共に考える生徒の姿があった。お年寄りが喜んでくれることを自分の喜びと感じながら考える事ができたのは、具体的な交流活動を通して相手意識を持てたからである。また、生徒は体の不自由なお年寄りの立場に立って、交流の場所や方法などを考える事で、自分の考えだけでなく多様な人の思いや願いを考える必要があることを実感していた。今後も、様々な人との関わりを取り入れた活動を行うことが相手意識を持って人と関わる実践力を養うことにつながると考える。
- ・事例（３）では、結婚差別という現在もある差別の現実について、自分のこととして考える学習となった。正しい知識を学ぶ事により、差別がいかに理不尽なものであるか考える姿につながった。素直に差別はいけない、自分はしらないと思っている生徒であるが、まだ現実社会に現存している差別を許さない強い心が育ったとは言えない。生徒の中に、強い心を育てていくためにも、日頃の生活の中に潜む差別や偏見に目を向ける学習を今後も継続する必要がある。

◇重点（２）に関わって

- ・事例（１）では、生徒同士が関わりながら活動する学習が、お互いに支え合い、認め合って学ぶ事につながることが分かる。この研究を通して、各教科の授業でも、生徒同士が自分の意見を交換したり、協力して問題を解決したりする学習が着実に位置付いてきた。まだ、生徒が自分の思いを伝え、分かろうとする姿としては十分ではないが、このような授業を継続することが生徒同士の人間関係を広げ、信頼関係を構築することにつながると考える。

◇重点（３）に関わって

- ・事例（２）の授業研究が終わった後、学級担任は先に示したC生の成長に喜びを感じ、周りにいた教員にC生の姿について語る姿が見られた。担任は、日頃よりA生の姿をとらえようと努め、その変容をつかみ、手応えを得た。C生の成長を、自分事としてとらえ理解してきたことにより教師自身の生徒をとらえる人権感覚が磨かれたといえる。このように、生徒の姿をつぶさにみてその様子をとらえたり、その成長を支えたりすることこそ教師自身の人権感覚の育成につながるといえる。

◇その他の取組に関わって

- ・全学級で「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」を実施するとともに、人権に関するアンケートを行い、生徒の姿の把握に努めてきた。その中で、日頃見えなかった生徒の姿や生徒の傾向をとらえ直すことにつながった。このような取組を継続することが、生徒の実態に合わせた指導を行う事につながる。
- ・PTA講演会、人権授業参観など、保護者や地域の方に向けて人権教育についてともに考える場を積極的に設けてきた。人権に関する授業での保護者の参観は少数ではあったが、学校の取組を伝えることが、地域の方と共に人権について考える事につながっていくと考える。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

南牧村立南牧中学校

これまでの到達点と今後の方向性を見据えながら、学校全体および人権教育のすすめ方に関して、それぞれ「本年度の目標」を設定し、一年間で何を達成するのかを具体的に示している。とくに、「人権感覚の育成」に焦点をあてながら、教科学習、学校における日常生活、保護者・地域との連携等を位置づけている点に特徴がある。授業において「自分の考えをもち、友だち同士の関わり合いで学ぶ」ような「支え合う学習」を促したり、高齢者との交流に際して「相手意識を持つ」ことにより、他者がおかれた状況や思いを想像できる感覚を育てようとしたり、結婚差別等の差別の問題に対して「希薄な人間関係と無知」という普遍的な視点からアプローチしたりしていることが注目される。全学級で実施された学級集団の傾向を把握するためのアンケートや人権に関するアンケートにより、生徒の実態を具体的に把握しながら取組が進められている点も参考になる。